**稲垣　浩 （いながき・ひろし）**

**１、プロフィール**

大正時代、海野篁として活躍。昭和12年歌誌「美籠」を創刊し、主宰する。23年に「国原」と改題し、発行を続ける。長きに渡り歌道の普及につとめた。

＜生没＞

1897（明治30）年１月26日 ～ 1978（昭和53）年５月９日

＜代表作＞

『稲垣浩第一歌集』『稲垣浩第二歌集』

＜青森との関わり＞

稲垣浩は三戸郡中沢村（現八戸市南郷区）に生まれた。

**２、作家解説**

大正４年相馬御風の推薦で「早稲田文学」に詩を発表して同氏主宰の「新生活」に所属。大正７年窪田空穂の門に入り「国民文学」の社友となる。昭和６年大日本歌人協会会員。昭和12年短歌文芸誌「美籠」（昭和23年に「国原」と改題）を主宰創刊、「国原」は現在に至るまで継続発行されている。東奥日報社主催青森県短歌大会選者（昭和22年）、北奥羽短歌協会会長（昭和36年）、青森県歌人懇話会副会長（昭和48年～52年）として青森県歌壇を指導し、本県文化の向上、発展に貢献した。

歌碑の歌

芝はらにね転がり聞く波のおと吾をひき入れその音とする

　　　　　　　　　　　　　　(『稲垣浩第一歌集』昭和48年８月、種差公園に建立）

青森県文化賞（昭和39年）、八戸市特別功労者表彰（昭和40年）、青森県褒賞(昭和41年)、従六位勲五等瑞宝章（昭和53年）

**３、資料紹介**

〇歌集『稲垣浩第一歌集』

図書

1962（昭和37）年３月

182mm×128mm

「おれには師は１人、空穂先生あるのみ」と著者が言っていた師窪田空穂と「地上」主宰対馬完治の序文で飾られた歌集で、昭和22年から34年までの歌518首を収める。めまぐるしい時代の変遷の中で生活実感を第一に表現した歌がまとめられている。